

春日部がもっと好きになる、まちの情報誌

kasukabe

Plus
かすかべプラス

2015 SPRING/SUMMER vol.4

アートが息づき、
文化を生み出すまち。

散歩に出かけたい!
春日部パブリックアート

彫刻のある街 1991年3月

アートなまちへ
ようこそ

K A S U K A B E P U B L I C A R T

散歩に出かけたい!

春日部パブリックアート

春日部のまちかどに数多く点在するパブリックアート。市とゆかりの深い彫刻家・加藤豊さんが鑑賞のポイントを案内。江戸時代、宿場町として栄えた春日部には、往時を偲ぶ商家も残されている。歴史を感じ、アートを楽しみながら、立ち寄りしたい、おいしいお店も紹介。歩いて、見て、触って、味わって…、春日部のまちをまるごと楽しもう!

KASUKABE PUBLIC ART 春日部駅東口周辺

「彫刻のある街づくり」を機に アートがまちにやってきた

「パブリックアートの多いまちは国内に何か所かあります。しかし、春日部駅周辺ほど、有名な彫刻家の作品が一堂に集まっているまちは見たことがありません」

加藤さんが語るように、春日部駅の東口周辺や古利根公園橋、市民文化会館周辺や西口周辺など、駅から歩いて行ける距離に日本屈指の彫刻家たちによる作品20点

以上が集まっている。まちがちよつとした屋外美術館のようだ。

きっかけは平成元(1989)年の「ふるさと創生事業」。市では事業の実施にあたって市民にアイデアを公募。これをもとに市が「彫刻のある街づくり—アート・アメリテイ構想」をまとめた。この構想に基づき、著名な彫刻家の作品が次々と春日部のまちにやってきたのだ。

さまざまな表情を持つ 彫刻に注目を

では、早速、作品を見ていこう。

まずは、春日部駅の東口周辺。ここにはさまざまな表情を持つ彫刻が並んでいる。東口から延びるブロンズ通りにある「おでかけ」。正装して春日部駅の方へ向いて

出かけようとする

ウサギの彫刻は、子どもたちからも人気が高い。その近くにあるのは「旅人・樹陰」。すらすらとした旅人が本物の木の下のくつろいでいるように見える。

「この作品はパーツのひとつずつを溶接しながら直にくっつけているのが特徴。作者の池田宗弘氏が始めた頃はまだ珍しい方法だったでしょう。アンデパンタン展(無鑑査、自由出品の美術展)が流行した当時、彼はスターだったと思います」と加藤さん。公園橋(西)交差点近くの「あのね」は、糸電話で遊んだ遠い日のひとこまをモチーフにしたほのぼのとした作品。ほかにこの近辺にある「詩想」「煌」なども見逃せない。

春日部駅周辺ほど
多くの彫刻が凝縮したまちを
見たことはありません



「彫刻家」加藤 豊さん

1948年、山形県生まれ。85年、第39回二紀展で宮本三郎賞受賞。86年、二紀会委員となる。89年、第43回二紀展で文部大臣賞受賞。2001年、二紀会退会。現在無所属。日本美術家連盟会員。日本美術専門学校校長。かつて春日部市に在任(現在さいたま市に在任)。



春日部情報発信館
ぶらっとかすかべ
まちの情報は、ここで入手できる。レンタルサイクル、風づくり体験もある。「クレヨンしんちゃん絵はがきセット」は要チェック!



煌(こう)
森田 やすこ





上/あのね 廣嶋 照道 下/旅人・樹陰 池田 宗弘



詩想 綿引 道郎



☆御菓子司 春日部 青柳
創業115年の老舗和菓子店。素材のおいしさを大切に季節感あるお菓子の店。彫刻「おでかけ」をモチーフにした「彩月」は風味豊かな焼き菓子。



☆おづみ園 本店
春日部内牧に茶園を持ち、日本茶の栽培から販売までを手がける。宿場町にちなんだ「伝承銘茶 粕壁宿」は、全国から注文が入る人気の銘茶。

みつけた！
おいしいかすかべ

おでかけ
藤原 吉志子



上/夏 桑原 巨守 下/フォーム 千野 茂

ジーンズ・夏 佐藤 忠良

秀逸な彫刻がずらりと 揃う古利根公園橋

春日部駅から徒歩5分のところに位置する古利根公園橋。市制30周年の記念事業として造られた、日本で初めての橋上公園だ。シラコバトをデザインした風見鶏や、市の特産品である麦わら帽子をイメージしたアーチが目を引く。「彫刻のある街づくり」の中核を担う青銅製の人物像5作品が設置されている。その一つが、日本屈指の彫刻家・佐藤忠良氏による「ジーンズ・夏」だ。

「この作品は、足組の仕方や腰に手を当てて三角形の空間を作っているところにうまさがある。奥行きや横の空間を上手に出そうとしたのです。彫刻で特に難しいとされる、土踏まずやアキレス腱もきれいに仕上がっています。それでいて、わざとお腹に肉をつけ、完璧でない人間らしさを表現しています。佐藤忠良氏のすごいところは、遠くから見ても、佐藤作品とわかるどころ。それが、彫刻の上手い人たる所以だと思います」

佐藤作品と対照的なのが、日本を代表する彫刻家・舟越保武氏の「茉莉花」だ。



月に吠える 手塚 登久夫



★丸八酒店の蔵

創業は江戸時代末期にさかのぼる歴史ある酒屋。美しい蔵を有する。藤の花から採取した花酵母を使った焼酎「かすかべ藤乃彩」を購入できる。



★光苑

全国からあげグランプリ4年連続金賞の「海鮮からあげ」は、海鮮のうまみかギュッと詰まったおいしさ。散歩途中の腹ごしらえに寄りたいたい。



★栃惣

昭和27(1952)年の創業。保存料や添加物を使わず、厳選した国産米と水だけの生地から作られた「栃惣せんべい」は、一度は試したい味わい。

みつけた！
おいしいかすかべ

遠くから見ても「あの人の作だ」とわかる作品には力がある





上/思い出 山本正道 下/記念撮影一風がー 峯田敏郎



茉莉花 舟越保武

人間的か宗教的か
彫刻の違いは造形で見分ける

「横から見ると少し前傾しているのがわかります。立体を知っているからできることです。いわゆる観音様の作り方と同じです。観音様の前に立つて、ぼっと見上げると目が合います。『茉莉花』も同じ効果を狙っているのでしょう。乳房もお茶碗をひっくりかえしたような形で、どちらかといえば人間味がない。佐藤作品が人間的である一方、舟越作品は宗教的な雰囲気があるといえます」

また、「茉莉花」の並びには、腰かけた女性が足元に手を伸ばしている「フォーム」がある。有機的なフォルムの中に生命の鼓動を表現している作品だ。

同じ公園内の「夏」や「思い出」、公園近くの「月に吠える」「記念撮影一風がー」など、ほかにも力作が揃う。



★東屋田村本店
旧商家の構えを今に伝える「東屋田村本店」の前には日光道中の道しるべがある。天保5(1834)年のもので、日光、江戸、岩槻の3方面が刻まれている。



★永嶋庄兵衛商店
慶長年間(1596~1615年)に玄米問屋として創業した。瓦屋根の上部中央に魔除けの鍾馗(しょうき)様が飾られている。

感じるなまのま...



上/巢立ち 加藤豊 下/瑠韻 一色邦彦



神話II 加藤豊



みうけた!
おいしいかすかべ

★むら山
産地にこだわり吟味した素材で作る菓子に定評がある。全日本和菓子大賞を受賞した経歴を持つ「梅若塚」はお土産にも喜ばれそう。



市民ボランティアが
磨き上げ、
びかびかに変身

平成26年9月26日、市民ボランティア8人が4体の彫刻を清掃。参加したボランティアの一人、三橋正行さん(大学生)は「直に彫刻に触れる機会はないのでいい経験になった。きれいになってうれしい」と語った。

彫刻の鑑賞は
洋服選びと同じ。
気楽に楽しもう



どろどろとした表面は 硬い粘土で作っている証拠

市民文化会館周辺には印象的な作品が点在する。同会館の入り口前にある「神話II」は、ギリシャ神話に登場するレダがゼウスの胸に今まさに飛び込もうとしている一瞬をとらえた作品。3m20cmもの高さがあり、市内の彫刻の中でも随一のインパクトを放つ。今回の案内役・加藤豊さんの手によるものだ。

「『どうやって作ったの』とよく聞かれます。実は、FRPという素材を使っており、上のレダと下のゼウスは別々に作っています。設置するときに溶接しているのです。塗り込んでるので、見てもわかりませんが、手の上のほうで2体に分けることができます」



風の門 峯田 義郎

中央図書館の入口付近にある「道標・鳩」は、「東洋のロダン」といわれた朝倉文夫に師事した柳原義達氏の作品。

「柳原義達氏は女性の像や鳩の作品で



道標・鳩 柳原 義達



小さい花 黒川 晃彦

表現活動をしてきましたが、どちらからかといえば、鳩の作品のほうが有名。普通、彫刻は粘土を乾かさないようにして作り、表面をなめらかにします。ところが、彼はあるて乾かかけた硬い粘土で作った。だから、作品にどろどろとした量感が出て、それが持ち味になっています」

鑑賞の仕方に決まりはない 好きな作品を見つけよう

市民文化会館周辺には、ほかにも「瑶韻」「巢立ち」「小さい花」「風の門」など、個性的な作品が揃っている。

「春日部にはいろんな種類の彫刻があります。鑑賞の仕方に『こう見なくちゃいけない』という決まりはない。ファッションと一緒に、緑色が好きなら、誰が何と言っても緑色の服を選ぶでしょう。春日部のまちを歩いて、自分のお気に入りの彫刻を見つけてください」



春日部市役所周辺にある 趣きある作品群

市役所の庁舎正面にある「大空」は、市の鳥、ユリカモメがモチーフ。東西ふれあい通り西口公園にある「道程」は、ちょっと足を止めて自分を見つめる時間を持ってほしい、という思いが込められている。

右/道程 伊藤 正人
左/大空 加藤 豊





[彫刻家] 加藤 豊さん

1948年生まれ。72年第4回日展入選(以降76年まで連続入選)。神話的な女性像や愛くるしい子どもの彫刻作品を作ること知られる。日本を代表する彫刻家の一人。

[漆芸家] 増村 紀一郎さん

1941年生まれ。東京藝術大学大学院修了。同大学名誉教授。紫綬褒章受章。重要無形文化財保持者(人間国宝)。2010年よりかすかべ親善大使。第9回春日部市美術展覧会審査員長。

[フレスコ画家] 金森 良泰さん

1946年生まれ。東京藝術大学大学院壁画科修了。千葉大学教育学部教授を経て、現在は、創作活動を続ける傍ら、春日部市教育委員会委員を務める。紺綬褒章受章。第9回春日部市美術展覧会審査員長。

春日部の魅力をより 高めるのは景観デザイン

——春日部のまちの印象を教えてください。

増村 藝大に勤めていたとき、大学のある東京から春日部に戻ってきて、駅のプラットフォームで深呼吸すると空気のおいしさがわかりました。「あー、春日部に住んでいてよかったです」と思ったものです。東口には彫刻が並んでいて文化的にもいい。

加藤 確かに春日部駅東口は宿場町の面影もあっていいし、駅周辺のモダンさと、少し離れた田園の風景のバランスもとてもいいですね。

金森 市では、小中学生を対象に、「未来の春日部」をテーマにした絵画コンクールを開催しているのですが、応募者の2〜3割は春日部駅をモチーフに出品してくる。駅周辺への関心が高いんですね。

加藤 都心部からのアクセスもよくなっていますよね。今後も人の流れがずいぶん変わってくるのでしようね。



増村 かなり便利になるでしょう。ただ、春日部の魅力をもっと上げるのは景観デザイン、つまりアートだと思います。

金森 今も春日部には「首都圏外郭放水路」通称「地下神殿」という、アートとっていい素晴らしい場がある。

増村 あれはいいですね。世界に誇れる。街中でいえば、現状、春日部駅東口の景観は良いので、西口をもっとおしやれにしたい。

アートので元気で魅力的なまち、 春日部をつかっていきたい。

多くの彫刻がまちを彩り、市展を開けば多くの作品が寄せられる春日部。その一方で、「アートはちょっと敷居が高い」と感じている方もいるでしょう。そこで、春日部とゆかりの深いアーティストの皆さんに「春日部とアート」「アートとの接し方」についてお話を伺いました。

加藤 西口にも少しずつ彫刻が増えてきていますよね。

増村 そういう意味では、

西口側で着々と建設が進んでいる新市立

病院の「ホスピタルアート」の検討がひとつのきっかけとなって、まちが変わるといいですね。



心を豊かにするアートが 暮らしの中にもっとあつていい

——ホスピタルアートは、アートの力で病院環境を癒しの場に整える試みですね。

増村 そうです。ホスピタルアートの先進国、スウェーデンの病院では、建築費の1パーセントをアートに使っているといわれ、アートの効果が期待されています。

——春日部のホスピタルアートの検討はどこまで進んでいるのですか？

増村 まだ始まったばかりで、すでに採用している他の病院への視察など勉強の段階です。

——どんな作品が飾られるのですか。

加藤 今、具体的な検討をしているところです。

増村 固定するのではなく、いろんな方の作品を飾ってもいいかもしれませんね。

金森 病院には今までアートに興味のなかった人もやってくる。そういう人にアートを見てもらって、「あつ、アートっていいな。美術館に行ってみようかな」と感じてもらいたいですね。アートは特別だけど、特別じゃない。心を豊かにするもの。もっと普通に生活の中にあつていいということを知ってもらいたいです。

加藤 若いアーティストたちの発表や育成の場としても活用できますね。

金森 そうそう。春日部市美術展覧会(市展)の入賞作品を借りて、順番に展示するのもいいですよ。

増村 それはあります。市展は、市民の方々が作品を作つて応募します。自分の作品を見てもらうことで、「昨日より今日。今日より明日。明日より来年」と自分自身の向上につながり、生きがいにもなる。

金森 生きがいは長生きにつながりますね。

加藤 20年くらい前、市が主催する教室で教えたことがあります。当時の生徒さんが、市展に出品して驚きました。みなさん、元気に頑張つていらっしゃる。

増村 そうですか。今、市展の出品者の平均年齢は60歳を超えています。市展の入賞作品を市立病院に展示することで、アートに関心を持つ人や、自分で作品を作ろうという人が増えるかもしれない。アートには新たな生きがいを生み出す可能性がありますね。新しい市立病院は、医療とアートの役割の両輪で、市民の健康を守る病院になりそうです。

金森 まちで気軽にアートに触れることができれば、市民の心にとりや潤いが生まれ、まちのイメージも高まります。

増村 そういった芸術活動にたくさん市民に関わってもらいたいですね。その意味では、我々はアートの種をまいているのかもかもしれません。今後でもできる限り力になりたいです。



俳句って、 楽しいな!

藤塚小学校の教室から

藤塚小学校が取り組む俳句の授業をレポート。みんな元気いっぱいに上手な句を作っているよ!



さあ、
早速俳句を作り
ましょう!

「理科の自然観察の後にも俳句を詠ませています」と千葉先生。



「花と俳句と実りの学校」が
藤塚小学校のテーマ

どんぐりが風に落とされころころりん
コスモスは風にふかれておどおどてる
やきいもは今がしゅんだよほくほく

個性豊かなこれらの俳句は、藤塚小学校
3年生の児童による作品。

藤塚小学校は「花と俳句と実りの学校」
をテーマに俳句の授業を取り入れている、
市内でも特色のある小学校だ。



23

14

市内の俳句会会長が
授業をサポート

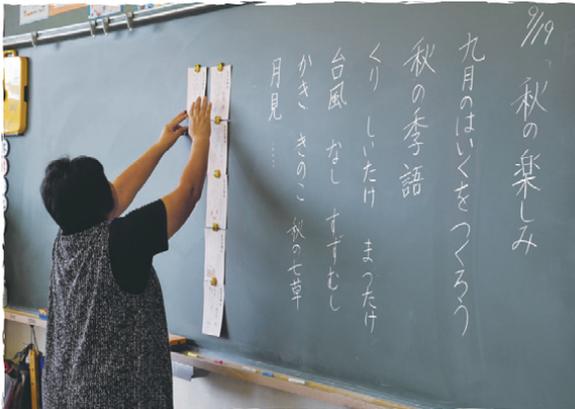
俳句の授業は、1年生から6年生まで、月に一度、それぞれ国語の授業の枠で行われている。時間内に一人一句を作るのがルールだ。

全校児童の句が集まると、市内の俳句会「東鳳会」の小山愛子会長の元へ届けられる。小山会長は、同校の元PTAで、長年、子どもたちのために俳句の授業をサポートしているのだ。届いた句に目を通して、俳句仲間と共に、各クラスの優秀作を選句する。

選ばれた作品は、校内の特別な場所に貼り出され、「小山愛子先生選」として学校だよりも掲載される。選句があることで、子どもたちのモチベーションはより高まっている。



各クラスの優秀作品は、毎月校長室前の廊下に短冊にして掲示される。



出来上がった俳句を清書し、イラストを描き添えたら完成!



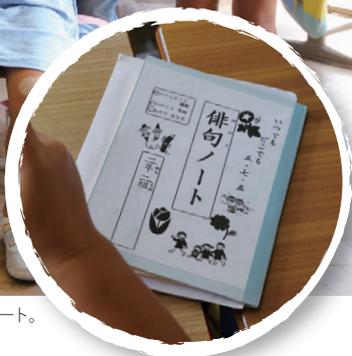
「季語を覚えるのが楽しい!」
と子どもたちからも大好評

俳句の授業が行われていたのは3年1組。テーマは「9月」だ。この日は小山会長が指導にかけつけていた。

担任の千葉博子先生が、「秋の季語で9月にふさわしいのは何ですか」と質問すると、「くり」「しいたけ」「月見」「鈴虫」と、子どもたちが元気に答える。

わからない季語が出てくると、「どんな虫だろう」「どんな鳴き方をするか」と一つずつみんなで考えていく。ひと通り季語を出し終わると、実際の俳句作りに取りかかる。1分もしないうちに作り終える子もいれば、指を折って五七五を数えながらじっくり考える子もいる。出来上がった句に対して、千葉先生や小山会長がアドバイス。どの子も最終的にはしっかりと一句を作り終える。大人も見過ごしてしまいがちな日本の四季を、俳句を通していいいに学んでいく授業だ。

俳句の授業は子どもたちからも好評。「季語を考えるのが楽しい」(尾花慎之介くん)、「五七五と組み合わせを考えるのが好き」(関遥香さん)、「どんな季語があるのか知っていくのがうれしい」(田中彩子さん)と、俳句の授業を楽しんでいる。



全児童が使っている俳句ノート。

みんな上手。
選ぶのが
楽しいわ



「俳句は頭の体操になる。若い人にどんどん挑戦してほしいです」と小山会長。

**俳句は子どもたちに
平等にチャンスを与える**

そもそも同校で俳句の授業が始まったのは、かつて教務主任を務めていた関根東彦先生(故人、俳号関根東鳳)の発案。30年以上の歴史がある。続いてきたのは、それなりの理由がある。

「俳句は教育効果がとても高い。子どもたちは語彙が少ないのですが、季語を出し合うことで初めての言葉を学んでいくことができる。自然を対象に詠みますので、いろんなところに目が向くようになります」と千葉先生。隣で聞いていた小山会長もやさしくうなずいて言う。

「俳句からの学びは大人も子どもも一緒。俳句を始めると、自然をしつかりていねいに見るようになります。道を歩いて花を見つければ、『何の花だろう』と興味を持ち、『いつ咲くのだろう』と季節に思いを馳せる。花鳥風月を見る目を養えるのです。特にお子さんは感性が鋭く、見たものを素直に表現できるから、見ていると、ときどきはつとめる句に出合うこともあります」

俳句は才能ではなくて、一瞬一瞬の感性がものをいう。だから、初めて句を詠んだ人が特選に選ばれることもあれば、逆に先生クラスでも選ばれないこともある。そこが俳句の面白いところ、と小山会長は言う。

「たしかにそうですね。作文を書くのは苦手だけど、俳句は得意という子どもはすべての子に平等に選ばれるチャンスがあります。選ばれば、自ずと自信につながります」(千葉先生)

**子どもたちの感性や
五感を磨いていきたい**

藤塚小学校では、平成19(2007)年から全校生徒の句を載せた藤塚小学校児童句集「笑顔いっぱい」を制作。第7集まで発行している。さらに、平成24(2012)年には「藤まつり」の俳句大会にも参加。平成26(2014)年からは子どもたち自身による選句も始めるなど、新しい試みへのチャレンジも欠かさない。

最後に吉田弘子校長に今後の俳句の授業への期待を伺った。

「6年間俳句を学んで積み重ねていくと、大きな力になります。実際、学年を追うごとにいい作品に仕上がっていくのがわかるんですよ。これからも、俳句の授業を通して、自然を目で見たり、触ったりさせながら、子どもたちの感性や五感を磨いていければと思います」

春日部

俳句の歴史散歩



小学校で俳句の授業が行われている春日部には、古くから続く俳句の歴史があった。

芭蕉が『奥の細道』紀行で最初に泊まった粕壁宿

元禄2(1689)年、『奥の細道』紀行で、松尾芭蕉は粕壁宿に宿泊したとされている。東陽寺の山門脇には「伝芭蕉宿泊の寺」と彫られた標柱が見られる。なお、芭蕉が泊まった場所は小洲山観音院など諸説ある。



東陽寺には『會良(そら)旅日記』の一文が刻まれた碑がある。

春日部は現代俳句の代表的俳人加藤楸邨が俳句を始めた地

日本の現代俳句を代表する俳人の一人、加藤楸邨は、昭和4(1929)年、粕壁中学校(現春日部高等学校)の国語教師として赴任し、8年間、春日部で過ごした。その間に同僚にすすめられて俳句を詠み始めた。

同じ頃、粕壁医院(現在の安孫子医院)に診療の手伝いに来ていた俳人水原秋桜子に師事する。二人は古利根川の河畔を散策しながら、俳句や人生について語り合ったという。春日部時代の作品は句集『寒雷』に多く収められている。

昭和12(1937)年、楸邨は意を決して上京、本格的に俳句の道を歩み始めた。

加藤楸邨

1905～1993年

「俳句の中に人間の生きることを第一に重んずる」ことを求め、「人間探求派」と呼ばれた。弟子たちには作る主体である人間のあり方が一番大切であることを教え、楸邨の創刊した句集『寒雷』からは金子兜太(かねごとうた)ら多くの俳人が生まれた。松尾芭蕉の研究でも知られる。



春日部高校敷地内に建立されている加藤楸邨の句碑。「木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ」と刻まれている。敷地内には、楸邨自筆による「落葉松はいつめざめても雪降りをり」の句碑もある。

埼玉県俳句連盟文化祭俳句大会

平成26年11月23日に開催された俳句大会。多くの参加者が春日部のまちと俳句を楽しんだ。

加藤楸邨旧居跡や日光道中を巡って俳句を詠む休日



加藤楸邨旧居跡にて。

春日部は「奥の細道」の松尾芭蕉や加藤楸邨といった俳人にゆかりのある土地。特に古利根川の近くには、楸邨の旧居跡や日光道中の道しるべなどがあり、吟行句会の場所としても人気だ。

今回の俳句大会は、まちの自然や史跡などを見て回り、最後に投句をするというイベント。

埼玉県内のさまざまな場所から集まった参加者は、真剣なまなざしでガイドの話に

耳を傾け、その場で句を詠む人もいた。



句材の多いまち、春日部に参加者たちは大満足

大宮から参加した砂村康子さんは俳句歴10年以上の経歴を持つ。「楸邨先生が春日部で句を詠んでいたこともあり、いつかは来たいと思っていたのが、ようやく実現しました。特に、見たいと思っていた古利根川はユリカモメもたくさんいてすばしかったです。また違う季節に来てみたいです」。同じく大宮から来た福田利子さんは「春日部は古利根川をはじ



春日部観光ボランティアの会によるガイドもあった。

め句材がとても多いですね。モダンだけ都會過ぎず、広々とした場所も残っていて清楚な印象。ぜひ、また句を詠みに来たいです」

岩槻から参加の伊藤和子さんは、「春日部は日光道中の宿場町の面影がところどころに残っていて、句を詠むのにいい場所。楸邨旧居跡では、猫を大切に飼っていたという楸邨先生の話が思い出されました。吟行は気心の知れた仲間と一緒に来るので余計楽しいです」と語ってくれた。

参加者はそれぞれの思いを句にしたためて投句。その後は、アクシス春日部で開催された講演「加藤楸邨の人間像(講師＝森田公司氏、かたばみ主宰)」に耳を傾げるなど、俳句一色の休日を楽しんでた。



まちの芸術家に会いに行く

榮水亜樹さん



自分が描いているというより、何か大きなものに動かされている気がするんです。

作品名: 守る / 撮影協力: MA2 Gallery

小学4年生のときに 画家になると決めていた

遠くからは蚊帳の形が浮き出ているように見える。絵に近づくとつれ、おびたらしい数の点で構成されていると気づく。しかも点は静謐な光を放っている。点を描いては剥がし、新たな点を重ねていく。気の遠くなるような作業から生まれた立体感が、見る時間帯や角度によって絵の印象を変えている。

不思議な魅力の絵を描く画家の榮水亜樹さんは、生まれも育ちも春日部だ。

「子どもの頃、市内の彫刻をよく見ていました。お気に入りのはうさぎの彫刻『おでかけ』。ベンチのある彫刻『小さい花』にも座って遊んでいましたね」

画家を目指したのは小学4年のとき。『将来画家になる』と作文に書きました。親がそんな私を美術館に連れて行ってくれ、本格的な絵画と出合いました」

以来、印象派やピカソ、クレモニーニなどに影響を受けてきた。



手に持っているのは、紙粘土とアクリル絵の具で作ったオブジェ「手がかり」。

点は違う。筆を下ろすと大きな点ができたり、小さな点ができたり、意志が含まれない。そこが面白い」



キャンバスに一点一点、点を描いていく。乾いたら一度剥がし、また色を重ねる。

古利根川沿いの散歩で イメージを膨らませることも

食事の時以外は、ずっと無心にキャンバスに点を打ち続けることもある。

「自分の中から湧き出るものというより、先に作品があり、何か大きな力によって描かされている感じがします」

制作の間には、古利根川沿いを散歩し、イメージを膨らませることもある。

「水面の波打つ感じとか、自然を見るのが好きですね。八幡橋あたりから見る夕景はいつ見ても感動します」

今後この地で作家活動を続けていきたいと語る榮水さん。将来が楽しみなアーティストだ。

PROFILE

1981年生まれ。春日部市在住。2007年東京藝術大学大学院美術研究科絵画科専攻油画修了。「VOCA展2015 現代美術の展望—新しい平面の作家たち」(上野の森美術館・2015年)、「New Vision Saitama 4—静観するイメージ—」(埼玉県立近代美術館・2011年)他に出品。

アートなかすかべ人たち

かすかべの市民アートの集大成、春日部市美術展覧会

平成26(2014)年11月18～23日にかけて、ふれあいキューブで第9回春日部市美術展覧会(市展)が開催された。展覧会は全6部門あり、入選は、日本画8点、洋画133点、彫刻10点、工芸64点、書24点、写真46点。特に優秀な作品には市長賞、市議会議長賞、教育委員会教育長賞などが贈られた。会期中は過去最高となる延べ5,033人もの来場があり、アートへの関心の高さがうかがえた。洋画部門と工芸部門で市長賞を受賞したお二人にお話を伺った。



洋画部門市長賞 井上忠久さん
作品名『村の教会』

飲食店の店舗デザインを仕事にしている関係で、建物が好きです。20代の頃から描き始め、現在春日部では「長月会」で活動しています。受賞作は、フランスの田舎町ヴェズレーの教会を描いた作品です。感動の表現である絵画なので、キャンパスの中に空気感を描き込みたいと努力しています。今回初めて市展に出品し、大きな賞を受賞できたのでうれしく、また励みになりました。春日部市にはいっそう芸術・文化の発表の機会が増えることを期待しています。



工芸部門市長賞 赤坂郁男さん
作品名『銅板一枚物球体』

元々はダクトメーカーの製造部門で働いていました。58歳のときにダクトでオブジェを作り始めたのがアートに足を踏み入れたきっかけ。何度かダクトのオブジェを県展や市展に出し、5年前から銅板1枚で作る鍛金に挑戦しはじめました。ハンマーでトントン打ちながら形を整えるのですが、制作中は銅板との闘いだけの世界になる。それが作品づくりの楽しさです。人に見てもらおうと励みになります。これからも市民に愛され続ける市展であることを願っています。



今回の市展は、7月に詳細が発表される予定。

シャッターアートでまちを元気に!

「粕壁宿景観再生事業」の一環としてスタート

町火消の絵、歌舞伎役者、寺子屋の風景。春日部駅の東口には、江戸時代の浮世絵のような風情ある絵をシャッターに描いた「シャッターアート」が点在する。一点一点がまちや店の歴史をユニークに表し、見るものを飽きさせない。

このシャッターアートは、春日部駅東口商店会連合会が、行政の助成を受けて、2011年に「粕壁宿景観再生事業」の一環としてスタートさせた。当時、連合会の会長だった市川弘さんに事業について伺った。

「そもそも東口周辺は、江戸時代の『日光道中』の宿場町。春日部の商業発祥の地といっ

てもいい。地域力アップのため、元々ある地域の特徴を活かしたかったんです」

シャッターアートでまちが活性化すると嬉しい

発起人の一人として、市川さんは店舗を一軒一軒回って説明し、事業への理解を求めた。各店舗の経済的負担もあるため、すぐには賛同を得られなかったものの、最初に完成した古利根公園橋の公衆トイレの壁画を目にすると「まちのためならやってみよう」と賛同する店が徐々に増え、現在では30を超えた。

「今は観光ボランティアの方が、まち歩きツアーの中でシャッターアートを紹介してくれています。また、この取り組みがきっかけで、代替わりした店主との交流が生まれました。子どもたちに人気の『街キャラカード』も若い店主からのアイデアで生まれたものです。今後もシャッターアートが、まちの活性化に役立つと嬉しいです」



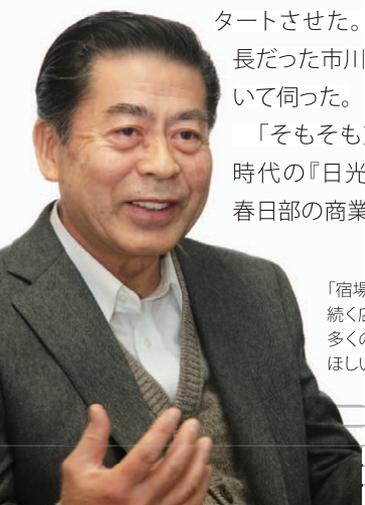
市川寝具

市川さんの店は、初代の市川寅之助の名前からイメージし、トラの絵をシャッターアートに取り入れた。



山田桐箆製作所

指物師の山田長松[天明2(1782)年生まれ]が創業。江戸時代の箆職人の作業風景と指物道具を忠実に再現した絵柄。



「宿場町の時代から100年以上続く店が今も多く残っている。多くの人に歴史ある街を見てほしいですね」と市川さん。

<こちら、シティセールス広報課です!>

READERS VOICE

前号のkasukabe+第3号では、「みなさん!子育て、楽しんでますか?」と題して「子育て」を特集テーマに取り上げました。ママ、パパをはじめ、たくさんの方から声をお寄せいただきました。ありがとうございます!

読者からの声をご紹介します!

②〜3ページ
「子育て、楽しんでますか?」

②春日部市内で家と新築し市外へ引越してきたばかりです。鳥羽は2才で慣れない土地で気持ちが不安定だと感じていました。そんな時この情報誌を見つけました。自分新地も色々見たり、また1からのママ探し不安で、子育て楽しんでますか?の問いに「はあ...全然楽しくない、楽しく過ごせていないや...」と書く同時に、こんな所が春日部にあるんだ!!とすてき〜♡早速児童センターへ遊びに行きました。親子で大興奮♪おイベントにも参加していますの♡

以前読んでいた児童館利用してママさんと話す機会が少ないかなと思います。張の鳥にと一緒に寝る母とママの笑顔が、幸せそうなの♡



妻が子育てサロンに参加し、こちらの情報誌をいただき初めて読みました。妻から児童館や支援センターへ行った際の話はよく聞いていました。が、春日部の子育てのしやすさが、わかりやすく紹介されていると思いました。エンゼルドームへ行ってみたいくなりました。

市内30代男性 (webから)

市内30代女性

PRESENT

感想をお寄せいただいた方、抽選で4名様に「かすかべフードセレクション」をプレゼント!

下記の認定商品を含む割合を、抽選で4名様にプレゼント! どの商品が当たるのかはお楽しみに。「おいしい春日部」を召し上げられ。



栃惣
「栃惣せんべい」



おづつみ園
「伝承銘茶 粕壁宿」



むら山
「梅若塚」



御菓子司 春日部 青柳
「麦わら帽子」

●応募受付期間

平成27年4月1日(水)~7月31日(金) 必着

●応募方法

①市公式ホームページ内専用フォームからご応募ください。→ [かすかべプラス](#) で検索!

②官製はがきに以下の項目をご記入の上、ご郵送ください。

お名前・性別・年齢・ご住所・電話番号

本誌の入手先 よかった記事(ページ番号) ご意見・ご感想

(応募宛先) 〒344-8577 春日部市中央六丁目2番地

春日部市役所シティセールス広報課 かすかべプラス第4号プレゼント係

*賞品の当選は、発送をもって発表に代えさせていただきます。

*応募の際にご提供いただく個人情報(氏名・住所等)は当企画以外の目的には使用しません。

▼専用フォーム



(春日部市シティセールス広報課)

川村明 宮下帯子 重枝紗智子
小俣智 山崎嘉那子
ぜひいらしてください。

後半で取り上げた俳句は、「言葉のアート」。5・7・5の中で、どうやって季節感を出すがキモ。手のひらサイズの「俳句手帳」を携帯した皆さんは、俳人 楳原先生に思いを馳せ、湧いてきた言葉をそっとしたためていました。一方、豊かな感性を發揮して詠む小学生たち。愛らしくも、キラリと光る言葉を紡ぐ姿を私たちに見せてくださいました。鉛筆と小さなノートが、世界観を変えてくれるんですね。

日常の中で気軽にアートな気分になれる春日部。彫刻や宿場町の面影を巡るのもよし、古利根川を眺めて句を詠むのもよし、です。穏やかで上質な時間が流れる感覚を味わいに、ぜひいらしてください。

POST TOWN WALK

「春日部市郷土資料館」歴史と文化を紹介します



歴史資料を展示し、旧石器時代から近現代までの春日部の歩みを知ることができます。講演会や体験講座なども実施しています。

所在地 / 春日部市粕壁東3-2-15教育センター内1階(春日部駅東口徒歩10分)
TEL / 048-763-2455
開館時間 / 9:00~16:45
休館日 / 月曜日、国民の休日、年末年始、祝日と重なる月曜の翌日
入館料 / 無料

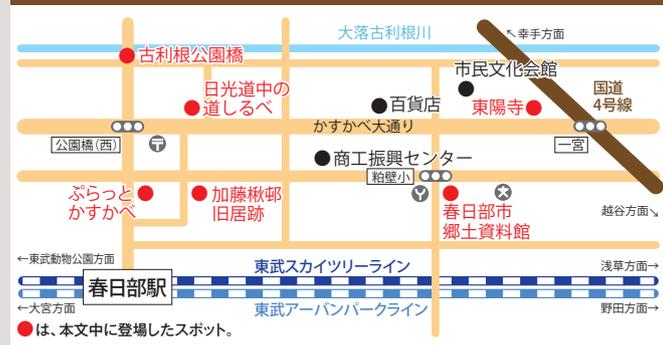
「かすかべウォーク」かすかべの魅力歩きつこう



情報満載!
お散歩のお供にどうぞ!

春日部市の文化・歴史・芸術などをテーマにした、まち歩きが楽しめる9コースを紹介。この冊子は市役所、庄和総合支所、ぶらっとかすかべで配布しています。

アクセスマップ



「編集後記」



表紙の人:春日部育ちの「菓子工房 オークウッド」の従業員さんにご協力いただきました。

今回のテーマは「アート」! 決してこの分野に明るくはいえない担当野。実は、少々不安な気持ちでスタートした取材でした。そんな中、彫刻家の加藤先生から「アートは、洋服選びと同じように考えていいんですよ」とお聞きしました。そう考えれば、おらかな気持ちで鑑賞できます。こんな私でも「この作品なんとなんか好きかも」と感じられる、お気に入りの彫刻が数点できました。